真・百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ

海色 桜斗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あの異世界オルガ動画シリーズで伝説の始まりとなる「異世界オルガ」を手掛けたウィンター氏ですら屈服させた、異世界オルガの中でも異彩を放つ《百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ》がついに待望（？）の小説化!!

オリジナル改変を加えつつ、オルガ達は勿論の事、原作の主人公である周防勇斗の行動についても自己解釈でより分かりやすく描きます。

有名動画主様が鋭意製作中なんだ、ノベライズ勢も今こそ絶対に……止まるんじゃねぇぞ!!

かなり遅くなりましたが、鉄血のオルフェンズ５周年、おめでとうございます。

目次

第一章『百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ』
第一話「遥か遠き北欧の地にて」 1
第二話「勝利の御子、覚醒」 18
第三話「二人の兄貴」 37
第四話「《爪》の包囲網と流星の誓い」 55

第一章『百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ』

第一話「遥か遠き北欧の地にて」

――時に諸君らは、《スルト》という名前に聞き覚えはないだろうか。北欧神話が好きな者、或いはアニメやゲーム、小説等といった創作物を好む方なら大体は聞いたことがあるはずだ。《神々の黄昏》とも呼ばれる神と巨人が戦ったとされるラグナロク大戦中に登場する炎の巨人、それが彼だ。世界を焼き尽くすと言われた彼の力は、どの作品群においても一際強大なものとして描かれる。

そして一方、《世界の破壊者》……時にそう揶揄される男、オルガ・イツカがこの物語にどう関わってくるのか。それは見てのお楽しみである。

「……っ!?」

次元の狭間。普段なら決して迷い込むことはないであろうその空間に、この少年、周防勇人はいた。近所に古くから語り継がれる伝承、その真意を暴くため、幼馴染の少女とその舞台となる神社を訪ねていた。そして、彼は伝承通りに好奇心で鏡を覗き込んだ。いつも通りなら何も起こるはずのない極普通の鏡。しかし、その日だけは違ったの

だ。次の瞬間、彼の身体は鏡に吸い込まれるようにその場から姿を消し、目を開けた時にはもうこの空間内を漂っていたのである。

「あれからオレはどうなったんだ……というかここは何処なんだ?」

視界に移る不可解な現象を前に彼は真っ先に単純な疑問を呟いた。だが、ここは彼以外誰もいない空間、その問いに答えられる者は存在しない。

「オレは一体何処に向かってるんだ、まさか訳も分からないうちに死んだわけじゃないよな!?」

「さぁな、アンタが何処のどいつなのか、俺は知らねぇしな」

思考が混乱し、不安に心が押しつぶされかけたその時、不意に自分の問いに答える者が突如として空間内に現れた。周防勇斗がその声のした方に向くと、褐色肌の、自分とは背丈が比べ物にならないくらい大柄で厳つい目をした赤いスーツを纏った男がそこにいた。

「だが、行き先位なら大体は見当がついてる。俺とアンタが元いた世界とは異なる世界、異世界だ」

「はぁ!?」

根拠がなく、現実離れした男の発言に思わず疑問を唱えてしまう。だが、その返答を聞いてさえもその男は真剣な眼差しでこう続けた。

「理解できねぇ気持ちはわかる。だが、そうじゃねぇなら今俺達がいる空間はどう説明がつく?」
「それは……そうですけど」
　正直、まだ混乱していることに変わりはない。だが、そんな自分に対してその男はあまりにも冷静すぎたのだ。もしかすると、この現象もこの男が発生させたものなのか。ふと、そう思ったがその疑念は男の次の発言で解消された。
「俺は訳あって異世界の旅をしている、アンタもその調子じゃ訳アリのようだな」
「何がどうなってんだか、さっぱり理解できてないですけどね」
　よく分からないが、この男といると妙に心強いというかそういうものを感じて、此方の不安とか緊張を和らげてくれている……そんな気がした。
「そういや、自己紹介がまだでしたね。オレは周防勇斗って言います、貴方は?」
「俺か?俺は、鉄華団団長のオルガ・イツカだ」
　鉄華団。なんか、何処ぞの組織の役職持ちだったのだろうか。その言葉の意味は分からずとも、それくらいの情報を理解するのは容易かった。そして、オルガ・イツカという名前。異世界転移と聞いたときにもしかしたら小説などでよくあるようなかつての偉人か何かが時を越えてきたのかと思ったが、その名前は全く聞いたことがない名前だった。

「よろしくな、ユウト。俺のことはオルガでも団長でも好きに呼んでくれ」
「じゃあ、初対面であれだけど兄貴って呼んでいいですか？」
「へっ、まさか俺がそう呼ばれるようになるなんてな……いいぜ」
褐色の肌をした大男、オルガ・イツカは、何だか感慨深いような表情を浮かべてニヒルに笑う。その瞬間、今までいた謎の空間の先に切れ目が走り、気付いた時には見慣れぬ天井のある屋内へと転がり落ちていた。
「■■■■■■■■■■■■■■■？」
「■■■■■■■■！■■■■■■■■■■■■■■■!?」
そして、オレの耳に飛び込んできたのは、聞いたこともないような言語で喋る人々の声だった。日本語でも英語でも、中国語やフランス語でもない。ただ、その人々が総じて身に纏っている衣装は、何と言うか、オレの住んでいた現代よりも遥か前に栄えたとされる古代文明のような服装であることは博識ではないにしろ、理解はできた。
「なぁ、ユウト、一ついいか。お前には今の言葉がどう聞こえてんだ」
不意に、オレの隣に立つオルガが険しい表情をしながらそんな事を聞いてきた。どう聞こえるも何も何を言ってるのかすら分からない、そう伝えると、彼はオレの代弁をするかのように、言い放った。
「悪いが、この中に翻訳の出来る奴はいないか？俺の連れがアンタ達の言葉を、理解で来

てねぇみたいなんでな」
「■■■■、■■■■■■■■■■■■?」
「■■■■■■■」
　俺の連れが理解できない、と言ったという事は少なくともオルガはこの人々の言葉を理解できているという事だろうか。その言葉を受けて、何やら周囲の人々が、ざわつき始める。
　暫らくして、その様子を一番近くで眺めていた一人の女性が、オルガに話しかけてきた。身長は俺より少し小さいけれど、身体的な発育は立派なもので、古代的な衣服も相まって、その服から胸部に付いた二つの双丘が今にも躍り出そうであった。オレは当然、目のやり場に困った。
「■■■■■■■■■■?」
「アンタが翻訳出来るのか、早速で悪いが頼めるか、お嬢さん」
「■■■■、■■■■■■■!!」
　その少女がオルガと一言二言会話を交わすと、その場で何か歌のようなものを歌い出す。一瞬、何か不思議な力が自分の体の中に作用したような奇妙な感覚に包まれる。しかし、次第にそれも収まり、同時に周辺の人々の声がはっきりとした意味を持った言語として、オレの耳に伝わってきた。

「わたくしの言葉が分かりますか、『勝利の御子（グレイブジーク）』様。わたくしはフェリシア、と申します」

そして、少女の声もはっきりと聞き取れた。何処か落ち着きのある、透き通った声の持ち主だった。オレは、言葉が理解できた嬉しさのあまり、最後に聞こえた『勝利の御子（グレイブジーク）』という言葉の意味を深く尋ねないまま、その子へ詰め寄った。傍から見れば完全に不審者である。

「き……君、日本語がわかるのか!?」

「いえ、天上の国の言葉は、わたくしには分かりません」

一縷の望みを抱いてかけた言葉だったが、意外にもあっさりと否定される。しかし、此方側の言葉を彼女は完全に理解できている様子。これは一体、どういう事なのだろうか。

「え……でも、今だってオレの言葉に答えてくれてるじゃないか」

「あ、これは《交渉》の呪歌（ガルドル）でございます」

言葉には自然とその人の意思、即ち言霊というものが宿る。その原理を用いて、たとえ自分が理解できないような言語を使う相手だったとしても、この歌を聞いた者にはその言霊を発し受け取る力が一時的に高まるのだという。確かに、よく聞いてみれば日本語とは明らかに違う。しかし、言葉の意味は不思議と分かるようになっていた。

「如何やら理解できたみてぇだな、ユウト」
「兄貴、アンタはこの子の歌を聞く前から分かっていたのか？」
「あー、まぁ、何つーかな……慣れだ、慣れ」
　果たして、自分の世界と全く原理が違う世界の言葉を、慣れだけで克服できるものだろうか。異世界転移なるものが初めての俺にとっては良く分からない感覚だった。
「……にしても、此処は一体、何処なんだ？」
「分からねぇよ。俺も異世界には何度も行ってるが、この世界に来たのは初めてだからな」
　何度も異世界を旅していると言っていたオルガなら、この世界の事情も知っているかと思ったのだが、そうでもないらしい。やっぱり、異世界ってくらいだから地球じゃないのかな？
「地球……暗い混沌の中に浮かぶ青い星ですか？」
「そこが勝利の御子様（グレイブジック）のお住まいになっていた世界なのでございますね」
　急にフェリシアがそんな事を言い出すもので、オレは驚いた。いや、詳しく説明すると、この時のオレは無意識に自分の考えを思い切り口に出して言ってしまっていたようで、フェリシアにはそれを聞いた瞬間に言霊から情報や映像を伝えられたのだろう。なんて、便利な。

「わたくしたちの世界とはまるで異なります……」

「!?」

そう言うなり、彼女はその綺麗な瞳に涙を滲ませ、感極まって、オレの手を両手で握りしめた。

「ああっ！やはり貴方様は、我らが守護神アングルボダ様が天上より遣わして下さった勝利の御子（グレイブジーク）様なのですね！」

「……は？」

「……」

いきなりの事に困惑するオレを置いて、隣にいるオルガが何だか終始無言で険しい表情をしていた。非常におっかないが、彼女はどうもその視線に気づいていないようだ。しかし、神の遣いと来たか、これはもしかして。試しにオレは今想像したことをそのまま彼女に伝えてみた。

「つまり、悪者みたいなのがいて、そいつをオレに倒してほしいのか……？」

何らかの魔物の侵攻によって、危機に瀕した人々が異世界から勇者を召喚する。オレが何時か何処かで見た異世界ファンタジー系のお約束ともいえる展開だ。そんなまさかな、と思いつつ発した言葉だったが、現実は小説より奇なり。まさにその通りだったらしく、彼女は力強く頷いた。

「はい!!我ら《狼》は現在、東は《爪》、西は《角》の民族に脅かされて、存亡の危機に瀕しております」
「今、この時も侵攻を受けており、戦勝の祈願をしておりましたところ、突如貴方様と隣のお連れ様が何処からともなく現れた次第でございます。どうか、そのお力で我ら《狼》をお救い下さいませ！」
「おおっ、まさにだー!!」
　ちょっと憧れていた世界への扉を自分が開いたみたいで、その言葉を聞いたとき、オレはワクワクが抑えられなくなって、つい叫んでしまう。これはつまり、オレにも何か隠された特殊能力があるってことなのか、燃えてくるぜ!!
「では、わたくし達にお力をお貸しいただけるのですね、勝利の御子（グレイブジーク）様」
　彼女がキラキラと目を輝かせて、オレを見つめてくる。そりゃあ、もう！男として此処まで心躍る展開を与えてくれたんだもの、とことんやってやろうじゃないか！……と、その前に一つ気になる事が。
「あ～、えっと、その勝利の御子ってのはやめてくれ。オレは勇斗、周防勇斗だ」
「はい、スオウユウト様とおっしゃるのですね」
　様、と呼ばれるのは悪くないが、流石に最初からだと箔が付きすぎてて、何だか恐れ多い。まぁ、そこら辺は後で訂正させてもらうとしよう。オレの名前を復唱した後、漸

く彼女は隣のオルガと正面から向き合った。意外と度胸あるんだな、この子。
「それで、ユウト様のお連れの方は……何とおっしゃられるのですか？」
「……俺か。俺は、鉄華団団長のオルガ・イツカだ。よろしくな、お嬢さん」
「はい、オルガ・イツカ様」
オルガとフェリシアががっしりと握手を交わす。しかし、そんな無事に終わろうとした自己紹介も、オルガの名前を聞いた一人の女剣士の呟きがきっかけで大きく荒れることになった。
「……何、オルガ・イツカ、だと……!?」
「フェリシア、此れは一体どういう事だ！勝利の御子（グレイブジーク）様だけを呼び出したならまだしも、奴まで召喚してしまうとは聞いてないぞ！」
「おのれ、『世界の破壊者』め……今ここで断罪してくれようぞ！」
そして、怒号を上げた人々が次々に、腰にぶら下げた剣を引き抜き、オルガの方へ向かって距離を詰めていく。あれ……もしかしなくても俺、とんでもない指名手配犯と一緒にいるのか!?
ふとそう思ったが、謎の空間から現在に至るまで彼を見てきて、そうは見えなかったというか。逆に何者かに悪役に仕立て上げられて、悲痛な最期を遂げさせられた……みたいなそんな感じだ。

「ま、待ってください、ルーネ！彼は勝利の御子（グレイブジーク）様のお連れ様なのですよ!?」
「退け、フェリシア。奴は危険すぎる……私のルーンがそう訴えている」
　フェリシアが銀髪の少女を止めようとするが、彼女に応じる気は全くなさそうだった。そして、そんな彼女が勇斗の方にも目を向けて、こう発言した。
「それに、お前が召喚した勝利の御子（グレイブジーク）とやら、私には奴からは何の危険も感じなかった。本当は奴は勝利の御子（グレイブジーク）などではなく『世界の破壊者』の僕なのではないか？」
「失礼ですよ、ルーネ！この方こそ間違いなく勝利の御子（グレイブジーク）様に相違ありません！」
「ふん、どうだか。兎に角、ここは離れていろ。奴だけは確実に仕留める……！」
　オレに向けた容疑を撤回しないまま、フェリシアの静止を振り払い、そのままオルガの元へ向かうルーネと呼ばれた少女。
「随分と人に勝手に気安く呼び名をつけてくれるな、おっさん達。この落とし前、どう付ける気だ？」
「黙れ、『世界の破壊者』なぞに我が祖国を滅ぼされてなるものか！皆の者、かかれぃ！」
　号令を合図に、その場にいた全員（フェリシア除く）がオルガに刃を向けて飛び掛かっていく。当人のオルガはそんな危機的状況を目の当たりにしながら、余裕しゃくしゃくという感じで笑っていた。
「覚悟ッ……!!」

「ぐうっ……！」

当然、武器も何も構えなかったオルガの身体に兵士の剣が深く突き刺さる。それを合図に他の兵士達も次々とオルガの身体へ剣を突き立てる。オルガは苦悶の表所を浮かべ、そのまま床に倒れる。刺された個所からどくどくと鮮血が溢れ出す。と、オルガは片手を上に掲げたポーズを取り……。

「だからよ、止まるんじゃねぇぞ……！」

そのまま硬直して動かなくなる。え、もしかしなくても死んだ？そんなまさか……幾等なんでもこれは呆気なさすぎる。その前に何でオルガは何も抵抗をしなかったんだ!?

「おい、お前ら！何で無抵抗の人間を平気で殺すような真似が出来んだよ!?」

「勝利の御子（グレイブジーク）様、誠に恐れながら申し上げます。奴は様々な世界を渡航する犯罪者でございます。そのような危険な輩を貴方様に近づけさせるわけにはいかないと思い、こうしたまでです」

オレが檄を飛ばすと、一人の兵士が此方に近づいてきて、今の状況をオレに伝えた。だが、それを理解できるほどオレはまだ人間が落ちぶれてはいない。

「だからって……そんなやり方じゃあ納得できる訳――」

「ヘッ、落ち着けよ、勇斗ォ……！俺はまだ死んじゃいねぇぜ」

「うるせぇ、邪魔すんな……って、はぁ!?」
「な、何ッ……!?」
　オレが怒りに身を任せて、目の前の兵士に掴みかかろうとすると、背後から聞きなれた声が響いてきたので思わず振り向く。そこには、さっき血を大量に流して死んだはずのオルガが、無傷の状態で平然と立っていた。これには、オレだけでなく、その場にいる兵士達も驚きの声を上げた。
「貴様、確かに死んだはず……なら、何故!?」
「悪ィな、今の俺はちょっとした事情で死ねない体になってるもんでな」
「ふ、不死身だとでもいうのか!?ば、化け物め……!」
　オルガの言葉を聞いて、恐怖に震え上がる兵士達。中には腰を抜かして立てなくなる者もいた。そんな中、オルガはお得意の余裕に満ちた笑みを浮かべ、その場で力強く立ち塞がった。
「さっきは良くもやってくれたな。この落とし前、相当高くつくぜ?」
「くッ……おのれ、これ以上祖国を危機に追いやれるものか。皆の者、突撃――!」
　あの現状を見ても、今だ立ち向かおうとする猛者達が再び立ち上がり、先程と同じように攻撃を仕掛けようとする。しかし、この時彼らには感じられなかった。オルガの背後から徐々に此方に近づいてくる悪魔の足音が。

「フヘッ、本当ならお前の力は後に取って置きたかったんだけどよォ、こうなりゃ仕方ねぇよな」
「そうだろ……ミカァ!!」
　オルガが声高らかにそう叫んだかと思うと、オルガの背後の地面が割れ、中から人間サイズの小柄なロボットのようなものが彼らの方へ跳んでくる。
　――白く輝くボディと、特徴的な黄色い二つの角。
　――意志を持っているかのように光る、緑色の眼。
　――両手に持った、超特大のメイス。
　そう、『異世界オルガ』シリーズ及び『機動戦士ガンダム　鉄血のオルフェンズ』のファンの読者ならすぐに理解できたはずだ。彼こそが『世界の破壊者』オルガ・イツカを守る一柱。その名も――
「今回は、すぐに俺の出番だったね、オルガ」
「勘弁してくれよ、ミカ。耐久力の低い俺じゃ相手に出来なさそうだったし、な」
　ガンダムバルバトスと三日月・オーガス……鉄華団の白い悪魔が今ここに降臨した。
「ひ、ひいっ、出たぁ！し、白い悪魔だ!!」
「ち、畜生！何でだ、体が動きやがらねぇ!?」
「小柄だというのに、何という気迫の持ち主か。この私が気圧されてしまうとは……」

見ると、先程まで復活したオルガを見ても戦意に溢れていた猛者達が次々と根を上げ、戦意喪失していく様が映る。それは勇ましく戦おうとしていた銀髪の少女……ルーネでさえも例外ではなかった。それ程までに目の前の彼は一際異彩を放っていたのである。

「で、アンタ達はどうすんの？」

「言っとくけど。今みたいに態と外すの、面倒くさいから、今度は確実に殺すよ」

次の獲物は何処だ、と言わんばかりに彼のモノアイが緑色に光り輝く。すると、ルーネは何を思ったか彼の目の前に姿をさらして、首を垂れた。

「ここまでの差を見せつけれれば、この際、どんな力だろうと構わない。頼む、我が祖国を守る為、その力、貸してくれないだろうか……!?」

そこで兵士達は、又もや驚愕の表情を見せる。《狼》の氏族内で最強と謳われた『最も強き銀狼（マーナ・ガルム）』の次代を継ぐとまで言われたルーネが、得体の知れない相手に頭を下げて頼みこんでいる。恐らく、そんな彼女の内には悔しさが滲んでいたに違いない。そんな思いをしてまで、彼女は必死に頼み込んでいるのだ。例えそれが歴戦の化け物であったとしても、自身の祖国を守るためならば悪魔に魂を売る事さえも厭わない、国に最も忠誠を尽くすべき騎士の姿勢を貫いたのだった。

「……だってさ、オルガ。どうする？」

「決まってんだろ、ミカ。俺達の目的を果たすためにはどうするべきか、最初から決まってんだろ」
「そっか、うん。ちょっと聞いてみたかっただけだ」
　彼女の真摯なに頼み込む姿を見て、白い悪魔は構えたメイスを下ろす。直後、持っていたそのメイスは光の粒子となってその手から消え去った。そして、それは白い悪魔の戦闘行動終了を周囲に知らせる事となった。
「そこのお嬢さん、顔を上げな」
「……ッ」
「あぁ、分かった。鉄華団はアンタの側に乗ってやる」
　こうして、原作主人公・周防勇斗を巻き込んだ、オルガ・イツカ及び鉄華団の面々が繰り広げる、何度目かの異世界の旅が始まった。

第一話・完

〜次回予告〜
　強大な勢力が蔓延るこの世界で、《狼》の氏族と鉄華団は晴れて協力関係となった。そんな中、『勝利の御子（グレイブジーク）』として呼ばれた周防勇斗に最初の試練が襲い掛かる。

次回、「真・百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ」第２話「勝利の御子（グレイブジーク）、覚醒」
全てを破壊し、全てを繋げ。

第二話「勝利の御子、覚醒」

「――頼む、我が祖国を守る為、その力、貸してくれないだろうか……!?」

ルーネという少女の切実な願いを聞いてから、一週間後。周防勇斗とオルガ・イツカ、三日月・オーガスの3名は《狼》の当主、ファールバウティに正式に共に戦う協力者として認められ、要塞の中の一室を自室として与えられた。しかし、最初から実力を見せたオルガと三日月とは違い、どの程度の実力かすら分からない勇斗は兵士達に中々受け入れられずにいた。

「はは……前途多難だな」

オレが元居た現代と違って、衛生面が完全に管理されているわけでない為、水や食料を口に運ぶたびに食中毒に襲われ、鍛錬に参加しては体の限界が先に来る。挙句の果てに町の人々からは『アンナル』『スコル』等と呼ばれ、馬鹿にされる始末。オレの華々しい異世界生活ライフはいきなり窮地を迎えていた。

「兄貴とミカさんは平然と食べたり飲んだりしてるんだけどな……」

「別に、普通でしょ」

「いや、オレからしたら全然普通じゃないんスけど……」

　初召喚時のあの騒動の後、フェリシアによって届けられたオレが元の世界で所持していたスマートフォン。それについて説明しようとして、写真フォルダをタップして出てきた写真に映っていた少女の姿……一緒に神社に行って、この世界に来るときに離れ離れになった幼馴染みの志百家美月。あの場でオレだけがこの世界に転移に巻き込まれたなら、彼女はきっとまだあちら側の世界にいる。
「まぁ、何でもいいけど。今日も鍛錬、やるよ」
「……了解ＤＥＡＴＨ」
　そして、もう一つ分かったことがある。それは、召喚されたはいいが、気軽に元の世界には戻れないという事。伝承を基にするなら、一ヶ月後の満月になるまで、合わせ鏡の効果は発動しない。つまり、この世界で既に用済みお払い箱なオレが幼馴染みの彼女と再会する為には、この世界で一ヶ月過ごさねばならなかったのだ。
「そう言えば、兄貴は？」
「オルガは髭のおっさんの所。次の戦いに備えて話があるんだって」
「流石、兄貴。出世が早くて羨ましいぜ」
　もう、最初にこの世界に来た時の様に自分が勇者であるという夢を見てはいない。むしろ、フェリシアの言う『勝利の御子』とやらはもしかしたらオレなんかじゃなくてオルガ達なのではないか、そう思えるほどにもう全てが燃え尽きていた。

「じゃあ、先に行ってるから。後で必ず来てね、ユウト」
「……はい」
先に修練所へ向かうミカさんを見送り、今日も生きるために飯を喰らう。日々増えていく屈辱に耐えながら。現実世界でオレの帰りを待っているであろう幼馴染みに再会するために。

Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ…　周防勇斗　→　三日月・オーガス

「ふっ……ふっ……！」
修練所について間もなく、三日月は日課の筋トレに励んでいた。いつも来ている鉄華団のマークが入った年期あるジャケットと紺色のタンクトップを脱ぎ捨て、上半身を裸の状態にして懸命に寡黙に取り組んでいた。時代背景的に外でも上半身が裸というのは別に気にされるものではなく、三日月も特にそういう邪魔が入らないことに割と安心感を抱いていた。
「す、すげぇ……流石は白い悪魔」
「俺もあんながっちりした肉体、敵兵のかなり強い奴のしか見た事ねぇぜ……」
その様子を剣の素振りをしながら見つめる、ムスッペル隊の兵士達。勿論、訓練中に

余所見をするなとルーネに思い切り叱責されていたが。それでも、見惚れずにはいられなかった。

「くっ……んっ……ふっ……！」

そして、兵士達が見ていたのは何もその身体つきだけではなかった。三日月の背中、首元にある他の人間には付いていないはずの三つの尖った物体。そう、三日月が元の世界で幼少期に受けた阿頼耶識を埋め込んだ手術跡である。

「あれも鍛えたら出てくるもんなのか……？」

「いや、もしかするとアレが白い悪魔である所以なんだろうよ、きっと」

一人の兵士が口にしたその推測は、正確には違うが、大体合っている。この阿頼耶識がなければ三日月は愛機のバルバトスを動かすことが出来ない。ただし、それは元の世界にいた時の話ではあるが。

「そこのお前達、また余所見をしているな、いい加減にしろ！」

「は、はい！すみませんでした、隊長！」

ルーネから二回目の叱責を受け、流石の彼等もこれ以上はマズいと思い、訓練へと戻った。話し込んでいた兵士達が避けたことにより、ルーネのいる位置から三日月の姿が見えるようになる。そこで、ルーネは初めて三日月がすぐ近くにいる事を気配だけでなく、姿で捕らえることが出来た。

「……（やはり、奴も此処にいたか。相手の気を感じ取れる性質も中々に厄介だな、奴の前では）」

ルーネは「月を喰らう狼（ハティ）」という相手の脅威を嗅覚で感じ取れる力を持つルーンの所有者だ。だからこそ、感じ取れる。《世界の破壊者》オルガ・イツカを守護する一柱《白い悪魔》三日月・オーガスに隠された研ぎ澄まされた獣のような本性を。次代の「最も強き銀狼（マーナガルム）」と呼ばれた彼女でさえも危惧する程の力を。

「……何？」

ついうっかり彼の姿を繁々と眺めすぎていた、と気づいたときにはもう遅い。その視線に気づいた三日月が痺れを切らして、ルーネに要件を問う。

「い、いや、すまない。何でもないんだ」

「ふーん……そっか」

唐突な質問に焦ったルーネは、何でもない、と謝罪してしまう。一方、そんな彼女の言葉を聞いた三日月は、彼女から途端に興味をなくし、再び筋トレに励み始めるのであった。

「……（げに恐るべきは白い悪魔、か）」

そんな事を思った時、彼女はふと疑問に思った。自分が聞いていた伝承では《世界の破壊者》オルガ・イツカを守護する者はあと二人いたはずであった。が、今こうしてオ

ルガと共にいるのは、この三日月・オーガス只一人。他の二柱は何処にいるのだろうか。
「な、何度もすまない、三日月。少し貴殿らについて質問があるんだが、いいか？」
「……いいよ、答えられる範囲でだけどね」
　彼女が勇気を振り絞って、三日月にそう声を掛けると、ほんの僅かな沈黙の後、三日月がそう答えた。彼女は安堵の息を漏らすと、伝え聞いた伝承の齟齬について質問を続けた。
「その、私が聞いた貴殿達の伝承には、オルガ・イツカを守護する者として貴殿以外にあと二人いたはずだ、その二人は今何処にいるのだ？」
「それってもしかして、シノと明弘の事？」
　シノと明弘。彼は確かにそう口にした、という事はその名前の人物こそが残る二柱ということになる。彼女はその返された問いに力強く頷いた。
「それはちょっと分かんないや。多分、こっちにも来てるんだろうけど」
「わ、分からないのか？しかし、貴殿らは眷属であるなら魔力的なもので繋がってるのではと」
「眷属、とかそんな関係じゃない。俺達とオルガは、家族だ」
　その答えを聞き、ルーネは驚いた。仮に三日月の言う通りだとすれば、自分の伝え聞いた伝承と大分齟齬が発生していたものだと理解できる。ならば、何故、彼らはそう揶

揄されたのだろうか。
「それとさ、さっきアンタは伝承がどうとか言ってたけど。それ、誰から聞いたの」
三日月が先程の彼女の質問から引っ掛かった点について、彼女に尋ねる。これは当然と言えば当然だろう。伝承とは通常であれば、その世界の史実に基づくものだ。だが、その伝承に何故か異世界から来訪した自分達の事が書かれている。彼らが今まで旅してきた世界では、このようなイレギュラーは起こったことがない、これを異常と言わず何という。
「アストラル帝国の神官でいらっしゃる、アレクシス様だ」
「そっか。じゃあ、今度ソイツにあったら、間違ってるよって伝えてくれる?」
彼女がその人物の名を挙げた事で、その人物に指摘するよう、平然とルーネに伝える三日月。幾ら権力を持っている相手だとしても、間違っているなら指摘する。その忠告を無視するだけなら、それ以上の事はしない。逆手にとって襲い掛かってくるようなら潰す。三日月・オーガスとはそういう人間だ。
「そ、それは無理だ!相手は帝国の神官様だぞ!?」
「そっか。じゃあ、いいや。もし、俺が直接会ったら、その時に言うから」
この男とアレクシス様を直接合わせるわけにはいかない、と心の中でそう思ったルーネであった。例え直接的な害は与えずともそれが帝国への反逆と捉えられる気がした。

もしそうなってしまえば、隣国との戦いでの勝ち負けに関わらず《狼》は滅ぶことになる。危惧するのは、当然の事だった。

　しかし、今の自分にはこの強大な力を持つ《白い悪魔》に勝てる術はない。それは、一週間前のあの日、既に分かっていた事だ。では、どうすれば止めることが出来る？ルーネが心の中でそこまで慎重に議論を重ねた時、三日月はルーネを一瞥すると、こう言った。

「もしかして、此処でそういうのは駄目だったりするの？」

　それは、いい意味で三日月らしからぬ問いだった。そう、彼等はただ単純に異世界の旅を繰り返しているわけではない。どんな世界であっても、「自分達の本当の居場所」を探して旅をする。その為ならば、例え自分達の世界で守らなくても良かった暗黙のルールや決まりみたいなものも守り切れる範囲で戦う。彼等が異世界で身に付けた、新たな戦略の一つだった。

「あ、あぁ。余り波風は立てないでいてくれると、助かる」

「そっか。今はまだその時じゃないって事だね」

　そう発言した後、三日月はまた自己の鍛錬に戻っていった。一方のルーネはと言うと。

「私もまだ研鑽が足りていない、そういう事か」

自分が信じてきた伝承の、秘匿されてきた見えざる知識を前に、彼女は自身の不甲斐無さを改めて実感したのだった。

Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ…　三日月・オーガス→　オルガ・イツカ

「ミカは相変わらず人気者だな」

城の中から中庭を見渡せる窓辺に佇む男が一人。そう、彼こそこの世界で《世界の破壊者》と恐れられた人物、オルガ・イツカである。幾つもの世界を巡って得た圧倒的なカリスマ力と戦全体を指揮する力が評価され、《狼》軍が他の氏族と戦う際の作戦参謀として見事なスピード昇格を果たしていた。そして、今は次の戦に備えての作戦会議の帰り。共にこの世界に来た三日月の様子を見ていつも通りだと安心していたのだった。

「オルガよ。急で済まぬが、この年寄りに少しばかり時間をくれぬか？」

「親父……」

その時、オルガの後ろから現れたのは、この《狼》の現宗主であるファールバウティだった。オルガと三日月の両名は既に戦場においての実力を評価され、宗主直々の盃をも受けている。ファールバウティにとってはオルガは実の息子のような存在、オルガにとっては実の父親のような関係にまでなっていたのだ。

「先ずは先日の戦いでの働き、感謝せねばなるまいな」
「いえ、あの結果は俺だけの力じゃないっすよ。経験豊富なロプトの兄貴がいてくれたからだ」
「ふふ、そう謙遜せずともよい。寧ろ、お前の機転で乗り切れたものもあると他の者から聞いている」
　親子の盃や兄弟の盃等はオルガ達が元々いた世界にもあったものだ。それ故にその盃を受けた後に背負う責任の重さを彼は十二分に知っていた。だからこそ、今自分が出来る最善の手を前線を常に支え続けるロプトと共に戦場の指揮を奮い続けていたのだ。
「ところで、お主と共に来た《勝利の御子（グレイブジーク）》殿だが」
「勇斗の事か。俺はアイツはアイツなりによくやってると思いますよ。戦いなんてもんと無縁の世界から来てんのに何とか慣れようと必死になってる。だから、俺はアイツの力にもなりたいんです」
　三日月の他に共にこの世界に来た勇斗の事については、度々一緒に行動する事の多い三日月から報告を受けていた。彼が元居た世界と違って、全ての生活のライフラインの衛生面が完璧に保たれているわけではないのに、生きる為にそれを食べて過ごさねばならない。一週間ではまだまだ慣れには遠く、それなりの時間をかけて徐々に慣らしていかねばいけない。転生する事に慣れてしまったオルガ達にはもう味わう事の出来ない

人間味のある、その欠点を抱えながら生きている勇斗があまりにも眩しかったのだ。
「お主がそこまで意気込んどるんじゃあ、特に心配はなさそうじゃな」
「ええ。それに、アイツには磨けば光る何かがある、と感じましたんで」
勇斗と初めて出会った時に、オルガは既に感づいていた。戦闘面では経験の差で劣るとしても、それ以外の彼の特化した何かが今の《狼》の状況を打破する力になると。初の異世界への旅路で出会った望月冬夜。彼の神の恩恵を過剰に注がれて開花したものではなく、その個人が本来持ち合わせている固有のもの。それがいつの日か開花する日が来る。そう、オルガは読んでいた。
「ふむ、それはまことに興味深い話よ。して、お主には何が見えた？」
「まだはっきりと分かった訳じゃありません。ただ、アイツは《狼》の未来を担える存在になるかもしれない、そう思いました」
「成程のぉ、では、その時を今後の楽しみとしておくとしよう」
《狼》の宗主ファールバウティは、彼のその言葉に何処か満足げに頷くと、そのまま自室の方へ歩いて行き、窓辺には、窓の外の景色を幸せそうに眺めるオルガ一人が残された。
「そういやぁ、マクマードの親父は元気にしてるかな」
この世界で親子の盃を交わしたファールバウティを見ていて、彼は元の世界で未だ生きているであろう元の世界で親子の盃を交わした男の事を思い出していた。今の自分

はこうして異世界の旅を楽しんでいるが、何せ向こうの世界には残してきたものが多すぎた。

「まぁ、親父のとこにはアジーさん達もいるから心配いらねぇか」

名前はもう忘れたが、一番の厄介所であるケツ顎の下種野郎を葬ってきたのだ。名瀬の兄貴が残していった元タービンズの面々に支えられて安泰な日々を送っている事だろう。

「ユージン達は無事やっていけてるよな。勿論、ライドとチャドもよ」

かつて鉄華団副団長として、自分とは違う位置から団員たちの世話を焼いていた盟友と、自身が打たれて殺された現場に居合わせた2人の団員の名前が浮かぶ。

「いや、あっちには、蒔苗の爺さんとクーデリアさんもいるんだ、きっと心配いらねぇさ」

オルガがそう呟くと同時に何やら中庭の方で大きな喧騒が起こり始める。仕方がねぇな、とオルガは疲労の溜まった重い腰を上げ、中庭まで歩いていく。その道中で向こうの世界に生きる彼らに届くはずのない言葉を残して。

「俺はまだこうして止まってねぇからよ。だから、お前らも止まるんじゃねぇぞ・・・・・・！」

自らが団長として最期に届けられたであろう団長命令が廊下に響き渡る。お前らの信じた《鉄華団》団長オルガ・イツカは別の世界で元気にやっているぞ、とそんな思い

を込めて。

Ｓｉｄｅ　Ｃｈａｎｇｅ…　オルガ・イツカ→　周防勇斗

「くそっ、何でこんなことに……」

朝、三日月に言われた通り、修練所である中庭に勇斗が出向いたところ、彼の行く手にいきなりルーネが立ちはだかり、彼に宣戦布告をしてきたのだった。

「周防勇斗。一週間前は色々あって出来んかったが、今日こそお前の力、量らせてもらうぞ！」

三日月の襲来によって、あの後に起ころうとしていた模擬戦の決闘が、この場に万全な状態の両名が揃ったことで勃発してしまったのである。勿論、これには他の兵士達も気分が上がり、いつの間にか両名の周囲には人だかりが出来ていた。これでは容易に抜け出すことさえ叶わないだろう。

「何も出来ぬし、腹も据わっていない。そんなお前が果たして本当にフェリシアの言う通り勝利の御子（グレイブジーク）であるのか、それともよく似た紛い物なのか。これではっきりするはずだ」

因みに、これを遅らせる原因を作った当の本人である三日月は兵士達によって特等席

に呼び出され、そこで黙々と様子を見守っていた。

「……（まぁ、幾ら俺がこの世界で弱かろうが、相手は女の子だし）」

戦争の概念が薄い世界で生きてきた彼は咄嗟にそう思う。だが、それは根本的に間違いである。例え、限界的な力量に男女差はあっても、ここは戦場の絶えぬ世界。力で翻弄する男に対し、洗練された技術と応用力で自分よりはるかに大きい男を討った女剣士の存在もそこまで珍しくない此処では、その常識は全く通じない。そして、何より。

「っ!?」

それは、男の方が女の限界量を越えていた時の話。幾らこの世界に来る前は父親の職業柄、剣術に相当腕があった彼ではあるが、鍛錬を毎日欠かさず行っていたわけでもなければ、その技術をぶつけ合い高め合う場があったわけでもない。つまり、筋肉量及び実力さえも彼女に劣っていたのなら、話は別である。

「ぐっ、ぐぁぁぁぁぁぁっ!?」

彼が彼女に切りかかる前に、既に彼女は彼の間合いに入っており、その剣は容赦なく彼の肩に鋭い一撃を加える。当然の如く、激痛が走り、その場に膝をつく。経験、鍛錬、技術。そのどれもがこの世界で彼には足りな過ぎたのだ。

「ふん、やはり思った通り。いや、それ以下か」

その程度では一兵卒としても使い物にならんな、とルーネは彼を一蹴する。そして、

彼らの周りを囲っていた兵士達の殆どが興味をなくして、鍛錬に戻り始めた。
「お前も見ていただろう、三日月。この男はてんで使い物にならん」
「うん、遅いね」
ルーネが三日月に話を振ると、三日月も一言でバッサリと切り捨てる。だが、彼は何かを感じ取ったのか他の兵士達の様にその場から離れようとはしなかった。
「待てよ……もう一本だ！」
想定以上の攻撃を受け、未だに痛みが走る肩を抑えながら、勇斗は立ち上がった。その表情には苦痛が浮かんでいるが、瞳はまだ熱意を失っていなかった。これには、流石のルーネも驚きを隠せないといった表情で彼に再び向き直る。
「ほう、まだ痛い目を見たいか。随分と酔狂な奴だな」
「いいぞ、今度は貴様からかかって来い。軽く揉んでやろう」
そんな彼女の挑発的な態度を受けながら、勇斗は再び剣を握り、構える。流石の彼でも今の一撃を受けて、彼女との歴然の差を思い知った。悔っていたのは、彼女の方ではなく自分の方だと。まともにやり合って勝てる相手じゃない、そう気づいた。けれど、だからこそ。
「女の子相手に無様晒したまま終われるかよ……ッ！」
叫び、彼女の間合いに詰め寄り、剣を振るう。しかし、その剣戟は意図も容易く彼女

に防がれてしまう。彼女は未だ冷静さを保ったまま、彼の繰り出す剣戟を捌き続ける。
「全くなっていないな。踏み込みが甘い、脇を閉めろ」
　1ミリも掠ることなく、華麗に剣戟を捌いていくルーネ。更に、そこに動きが加わり、彼の重心が徐々にブレていく。
「どうした？只でさえ鈍い動きが、更に悪化してきているぞ」
　おまけに動きが付いたことで彼の体力の限界が訪れようとしていた。そこからの焦りが、かえって命中精度を下げる。
「体力も限界のようだな。やはり、只の負け犬の遠吠えだったか」
「うる、せぇ……なッ!!」
　大振りで掠めた一撃を再び勢いに乗せて彼女に向かって放つ。しかし、そんな勢い任せの一撃は。
「甘い」
　彼女の太刀筋であっさりと弾き返されてしまう。そして、そのまま彼の手に持っていた剣は宙に放り出され、遠く離れた地面に転がった。
「ふーん……」
　勝利を確信した彼女は、その場で溜息をつき、三日月は何時ものように火星ヤシを頬張る。が。

「……甘いのは、そっちだろ!!」
「!?」
「やるな、アイツ……」
剣を失った勇斗が彼女の間合いに素手のまま入り込み、彼女の下半身を抱きしめるように掴み、押す。三日月がそれまでの評価を改め感心する程の、相手の一瞬の隙を突いた、見事な一手だった。
「……あれ……?」
しかし、勇斗がこの短時間で思いついたこの攻略法は、残念ながら正確に決め手とはならなかった。彼が幾ら押せども彼女は一向に倒れない。そう、ここでも結局は鍛錬の差が浮き彫りになったのである。
「(もしかして、傍から見たら俺、かなりヤバい位置に顔を突っ込んで……)」
「……」
ゴッ、と鈍い音がして、彼は地面に倒れ伏した。散々格好つけた割に、実に格好がつかない終わり方であった。
「では、医務室へ運びますねー」
「ユウト様ッ、御無事ですかっ、ユウト様ー!?」

その後、医療班とその知らせを受けてすっ飛んできたフェリシアに介抱されながら、医務室へ運ばれていく勇斗。そして、そんな勇斗の姿を傍から見つめる男が二人。三日月・オーガスとオルガ・イツカであった。

「オルガ、さっきの見てた？」

「ちょいとばかし遠目ではあったけどな。だが、いいもんが見れた。そうは思わねぇか、ミカ？」

「だね」

もう兵士達も何処かへ去ってしまったその場所で、彼らはその光景にほんの少しの希望を見ていた。

「もうちょっと覚悟が据われば、中々の大物になるかもしれねぇ、だろ？」

「うん、ああいうのを咄嗟の機転で出せるのは、やっぱ凄いね」

「あぁ、これは益々成長が楽しみになってきたって感じだな」

「……」

彼の意外な一面を見た彼等と、僅かとは言え彼に不意を突かれてしまったルーネ。この機転の利く柔軟な発想こそが彼がその後、《狼》の新たな宗主として君臨する日の最初の兆候であった事を、その場にいた彼等だけが知っていた。

第二話・完

〜次回予告〜

噂の《勝利の御子（グレイブジーク）》として、その片鱗を見せ始めた勇斗。そして、その世界で再び一ヶ月の時が経った時、彼は再び元いたの世界へ戻れるのか。それとも……

次回、「真・百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ」第3話「二人の兄貴」

全てを破壊し、全てを繋げ。

第三話「二人の兄貴」

「……ふざけんな！何で、何で何も起こらねぇんだ……！」

月夜の晩。神殿にガシャーンと大きな物を思い切り押し倒した物音と怒号が鳴り響く。その原因は、黒いタンクトップと現代風のズボンという、この世界では異質な出で立ちをしている少年、周防勇斗であった。

「ユ、ユウト様……！」

「……」

そして、彼の近くにはフェリシアとオルガ、三日月がその様子を見ていた。フェリシアは驚愕の表情を浮かべ、オルガと三日月は共に険しい表情のままその場に立っていた。何故こんなことになってしまったのだろうか。

――時は、その２日前に遡る。

「……」

勇斗がジークルーネに勝負を挑まれたあの日から一ヶ月弱の時間が経過した、ある日の事。この世界から向こうの世界へ帰還できる日までタイムリミット残り２日となっ

た頃、一応その時の噂は噂で広がりはしたが、それでも彼の元々の弱いところはあまり変わることがなく。その事実と追随するように、いつの間にか囁かれることすらなくなっていた。

「あと2日、あと2日待てば、元の世界に戻れるんだ……！」

思えば此処に来てからと言うもの、繰り返す日々は自分にとって地獄だった。だからこそ、俺は帰れるようになる日を待ちわびて耐え続けたのだ。その努力も、もうすぐ報われる。それは、今の自分にとってはこれ以上ない嬉しい事だった。

「待ってろよ、美月。オレは必ずそっちに戻るからな……！」

これが今の彼の唯一の救い、辛い現状に立ち向かうための大きな希望になっていたのは、誰の目から見ても間違いはなかった。

「勇斗、少しいいか？」

「兄貴……どうしたんだ？」

自分の世界に浸っている途中で、部屋の戸がノックされ外から自分を呼ぶ声がした。彼はその声の主がオルガと分かるや否や戸を開けて要件を問う。オルガとは、戦場に出ているか監視の任に就いているかで、あまり話す機会はなかったが、今日は珍しく予定が空いていたらしい。

「ちょうどお前に紹介したい人がいるんだよ。フェリシアさんもいるぜ」

「おはようございます、ユウト様。早速で悪いのですが、少しご足労お願いできますか？」

オルガの長身に隠れて、最初は見えなかったが、フェリシアもその後ろに続いている。この二人が一緒にいるのは珍しいなと思いながらも、勇斗は言われるがままに二人に付いて行くことにした。

「な、なぁ、兄貴、フェリシア。俺に紹介したい人って一体どんな？」

「何、会ってみればわかるさ」

「えぇ、きっとユウト様を気に入ってくれると思いますよ」

オレの問いにあまり深くは答えず、二人は黙々と街中を前へ進み続ける。そして、住民街に存在している一軒の家の前で立ち止まった。

「お前に紹介したい人は、この家の中だ。遠慮せずに行って来いよ」

そう言われて、兄貴に背中を押される形でその家の中に入ったオレは、家の中にあった中くらいのテーブルの近くの椅子に腰かけたブロンドの髪の男に視線が引き寄せられる。すると、彼方も此方の存在に気付いて、此方に視線を合わせてきた。

「……おや、もしかして君がオルガやフェリシアの言っていた《勝利の御子（グレイブジーク）》かい？」

「は、はい！なんて、言うのもアレですが、一応それらしき者の周防勇斗です」

「へぇ、意外と謙虚なんだね。噂の戦いの申し子（ジークルーネ）に勝利したというのも満更嘘ではない

ようだ」

見た目は細身で長身の超イケメン。だが、やはり彼も日々戦場を生きる者としての相当の実力を持っている事が周囲から滲み出るオーラのようなものから伺えた。

「いや、あれも本当、偶々と言いますか……手加減してもらって漸く、でしたし」

「ふむ。しかし、そうだとすると妙だな。それ程の大事件になっておきながら、その噂がオルガやフェリシア以外から全く伝わってこないとは」

「多分、皆そんな事なんてどうでもよくなったんじゃないですか」

「ここ数週間できっと気づいたんですよ。オレが勝利の御子なんてご大層なもんじゃなくて、偶然この世界に迷い込んだ役立たずの異邦人だって」

「……」

勇斗が自身を過小評価したような言葉をずっと喚いていたが、それでも彼は極めて冷静にその話に耳を傾けていた。

「偶然……では、君はアングルボダ様から遣わされた訳ではないと？」

「ええ、聞いたこともない名前です」

「成程。と、勇斗くんは言っているようだが、どうなんだい、オルガ？」

「俺にも詳しい事はよく分かんねぇですよ。最初から一緒に送られてきたわけじゃないので」

彼の問いにオルガは正直に答える。今までに様々な異世界を旅してきたオルガだったが、異世界に到着する前に誰かと合流するというのは初めての事例だった。かつ、勇斗とは転送されている途中で出会ったものだから、彼がどういう意図のもとに呼び出されたのか。その真相までは、正直ピンとこなかったのである。

「彼とオルガはこう言っているが？」

「わ、私は今もまだユウト様が勝利の御子だと信じております！」

彼はフェリシアにも話を振るが、彼女は最初会った時から変わらぬ、その一点張りだった。

「我が秘法《グレイプニル》が勝利を掴んだのを確かに感じたのです！ですから、誰が何と言おうとユウト様は勝利の御子に相違ございませんわ」

「へぇ、フェリシアにそこまで言わせるとは。面白いね」

これまで終始表情に変化を見せなかった彼が、フェリシアのその言葉を聞くなり、不意に笑みを浮かべた。今、この時、彼の中で確実に周防勇斗という男の評価が変わったのだ。思えば、この時から既に彼は、彼自身すら知らない心の奥底で自分に約束されていた将来の覇道が一つの存在に妨げられる危機を察していたのかもしれない。

「そう言えば、自己紹介がまだだったね。俺はロプト、フェリシアの実兄で《狼》の若頭だ」

「わ、若頭って……宗主（パトリアーク）の次に偉い人間じゃ――」
そう言いながらロプトが差し出した手を、恐縮しながらも握る勇斗。だが。
「いいいい痛っ……!?」
「……」
「あだだだ、に、兄さん!?」
彼の握る力は想像以上に強く、思わず声を上げてしまう。しかし、一方でロプトは至って平然に彼の手をこれでもかと握り続けた。流石に、そんな兄の暴挙を見ていられなかったフェリシアによって阻止され、それ以上は何もなかったが。
「兄貴、あんまり勇斗をいびり過ぎないで下さいよ」
「ああ、ごめんごめん。つい、ね」
オルガがそれとなく注意すると、ロプトはにこやかな笑顔のまま謝罪の言葉を述べる。そして、直ぐに彼は眉をひそめてオルガにこう質問した。
「しかし……彼は本当にあのジークルーネに勝ったのかい？素人同然にしか見えないんだが」
「まぐれ勝ち、なんですがね。信じてもらえるかは別ですが」
「そうか。けど、失礼を承知で言えば、彼はまぐれでも彼女に勝てるとは思えない」
「どうやって勝ったのか、参考までに教えてくれるかな？」

確かに他人から伝え聞いただけでは納得できない部分もあるだろう。一兵卒にすら足らない存在が次世代の《最も強き狼（マーナガルム）》と呼ばれた猛者に勝利したというのだ、当然と言えば当然である。オルガはそれを察して、後ろに引っ込んでフェリシアに介抱されていた勇斗の背中を押し、経緯を話しよう促した。勇斗もそれに応えるべく、若干言いにくそうにはしながらも、少しずつ当時の状況を語り始めた。

「俺もまともにやっても勝てないことは分かってましたから」

「だから、剣を態と緩く握って頃合いを見て、剣を弾き飛ばさせて勝ったと思わせた」

「後は、相手の気の緩んだ隙を突いた。それだけです」

「……」

勇斗の口から語られた一連の流れを、ロプトは静かに聞いていた。しかし、その静寂も一瞬。ほんの少しの間を開けて、彼は勇斗の背中を思い切り叩きながらこう言った。

「成程ね、やるじゃないか。謙遜する事はない、文句なしに君の勝ちだよ！」

「兄さん……！」

《狼》の若頭に太鼓判を押され、照れた勇斗は再び視線を下へと戻す。そんな姿を見たフェリシアは彼の後ろで勇斗の理解者が一人増えたことに喜びを噛み締めていた。

「ふふふ、これで彼女もいい勉強になっただろうしね」

「……？」

そう意味深に呟いたロプトは、穏やかな笑みを携えながら言葉を続ける。
「あれだけの才能を最初から持っていると、どうしてもそれに甘えてしまうところがあるからな」
「彼女があの歳で相手が出来るのはもう私かスカーの兄弟ぐらいだ」
「けれど、それでは歳が離れすぎているから、負けても何処かで仕方がないと思ってしまう」
「だからこそ君は適任だ。明らかに彼女より弱い……いや、それどころかそこらの雑兵以下だ」
「言ってくれますね……」
その話を聞きながら、自分が不意にディスられていると気づいた勇斗は、そのままがっくりと肩を落とした。それも意に返さず、ロプトは再び続ける。
「そんな君に負けたんだ。今頃、自分の未熟さを思い知ってがむしゃらに特訓してるに違いない」
「彼女はこれで更に強くなるだろう、君のお陰でね」
「それはもう手に負えなくなるのでは……？」
「望むところさ、今の《狼》には一人でも多く優秀な戦士が必要だからね」
漸く全てを言い終わり、彼は部屋の窓から遥か遠くを見据える。しかし、そこでふと。

勇斗はある人物の名前が彼の口から語られなかったことを疑問に思い、尋ねてみることにした。
「あの……俺なんかよりも三日月さんの方がよっぽどいい相手にならなくないですか？」
「あぁ、彼か。彼も確かに近いと言えば近いが……オルガ、君達はその異世界転移とやらをどれ位の時間繰り返しているんだい？」
「正直、ピンときませんね。これまでもいろんな世界を巡りはしてきましたが、あの時からどれ位の時間が経ったのか……それを知る術は俺等にはもうありませんから」
　最初の世界からちょっとした辺りまでは覚えている。だが、最近では自分と言う存在が並行世界上の如何なる場所においても観測され始めている為、転移門前に置かれている記録帳のようなものを読み進めるのも億劫になりつつあるのであった。
「そうか、じゃあもしかしたら実際には俺よりも上かも知れないし下かも知れないって事だな」
「ええ、そういう事になりますね」
「じゃあ、それこそ論外だ。それに、彼の強さは明らかに一線を凌駕している」
「それこそ、私とスカーの兄弟すら捻じ伏せてしまいそうなほど、ね」
　それでも、彼等はあくまで転移した世界の中で『自分達の本当の居場所』を確立して

いくのが目的であり、それは最初の頃から何も変わらない。故に、異世界に分岐した自分の存在が何をしたかどう至ったかまでを一々把握する必要がないのである。
「じゃあ、それこそ三日月さんを戦線に出せば――」
「いや、彼にはまた違った重要な仕事を任せている」
「今の私達が戦っているのは何も一つの国だけじゃない。今、苦戦を強いられている《爪》以外にも《角》や《牙》、《灰》や《蹄》。周囲に目を向ければ幾らでも敵はいる」
「それらの国に対しての抑止力。彼にはそれに徹してもらって、いざと言う時は戦線へと加わって貰う。今のところはそう言う算段で動いているわけさ」
　実際に、この世界には何故かオルガ達の情報がいい意味でも悪い意味でも伝わっている。幾ら猛者を求める周囲の宗主（パトリアーク）達が戦闘に特化した実力者揃いとは言え、《世界の破壊者》を守護する《白い悪魔》……その情報を聞けば、全員が慎重にならざるを得ないだろう。それを予め理解していた《狼》の宗主（パトリアーク）ファールバウティは、敢えてその配置にしていたのだった。
「だが、その均衡もいつ崩れるか分からない。だからこそ、今最も欲しいのは、この戦局を打破できる常識に囚われない起死回生の一手なんだ」
「どれだけ不名誉で卑怯でもみっともなかろうと構わない。正々堂々なんて綺麗事は言わない」

「そう、例えば圧倒的力量差があったジークルーネに君が一矢報いた時の様にね」
　ロプトの言葉をその場にいる全員が静かに耳を傾けて聞いていた。しかし、絶賛されているはずの当の本人の勇斗は相変わらず俯いたままで、ロプトが言い終わるや否や彼はすぐさま否定の言葉を返し始めた。
「買い被り過ぎですよ。俺はそんな事、思いつきやしませんし……」
「それに、俺は明後日には元居た世界に帰るんですから」
「おや、そうなのかい？折角知り合いになれたのに残念だな」
　一方でそんな彼の言葉を受けてもロプトは表情一つ変えずに、特に名残惜しそうにする気配もなく続けて口を開いた。
「会ったばかりではあるけれど、私は君の事が気に入ったよ。もう少しゆっくりして行かないかい？」
「そう言って貰えるのは嬉しいですけど……向こうには、待たせてる奴がいるんで」
　ロプトの誘いを断り、勇斗は足早に部屋の中から立ち去った。この世界では何もできない自分でも必要としてくれている存在がいる。それだけが原動力となっていた彼に、今更周囲にまた一人理解者が増えたところでその闇を取り払うだけの効力はなかったのであった。

――そして、運命の2日後。場面は冒頭のシーンへと戻る。
「アンタ……そうだ、アンタだよ！」
「きゃっ……！」
「アンタが俺をこの世界に呼んだんだろ……だったら、だったら帰せよ！」
周防勇斗が待ち侘びた満月の時はやって来た。しかし、彼は帰ることが出来なかった。それが分かると、彼は後ろにいたフェリシアに乱暴に掴みかかり、自分をこの世界に呼びつけた彼女に自分を元居た世界に返せと迫る。
「そ、そう言われましても……私にはユウト様を送信する力は御座いませ――」
「そんなわけないだろ!!」
「ふざけんなよ……もう一ヶ月この地獄を味わえってのかよ……！」
――最初は何かが出来ると思った。アニメや漫画で見るような特異な能力で無双できる未来が。
――けれど、現実は非情だった。自分にそんな力はないし、平和に馴染み過ぎたこの身体では、戦乱の世においてあまりに無力だ。
――慣れない土地柄と整備されていない環境下で腹痛や吐き気に苦しみ続ける日々。
――その度に周囲の人間に浴びせられる、侮辱と嘲笑の数々。
――共にこの地に転生してきた者達と実力差は天地の差。成り上がる同胞と置いて

行かれる自分。

――また、無力すぎる自分自身とこのまま向き合っていかなければならないのか。

「帰せよ……俺を日本に帰してくれよ!!」

「……」

「ミカ……?」

我を忘れて怒り狂う勇斗。フェリシアはその勢いに飲まれて何も言えずにいる。そんな時、今まで事態を傍観していた彼……三日月・オーガスが遂に動いた。

「なぁ、ユウト」

「責任取れよ、帰せもしないのに呼んでんじゃ……ピギュ!?」

「ごちゃごちゃ五月蠅いよ」

相変わらずフェリシアに強引に迫る彼のタンクトップの胸倉を思いっ切り掴み、詰め寄る。それと傍から見ていたオルガは、いつもは自分が何度もそれを受けている立場故に、その光景を固唾を飲んで見届けることに徹した。

「み、三日月、さん……!?」

「アンタが今ここでコイツに当たっても帰れる保証はどこにもないだろ」

「で、でも、俺には向こうで待ってる奴が……」

「良いから黙って聞いてろ」

正気には戻ったが、まだごね続ける勇斗に三日月は一喝する。現に、落ち着きを無くした彼を黙らせるにはその一言で十分だった。三日月はさらに続ける。
「来た日と同じ条件下で帰れないなら、アンタには此処で果たすべき事があるんじゃないのか？」
「果たすべき……事？」
「そうだ。俺やオルガが色んな世界を転々として本当の居場所を探しているように、アンタにもやるべき使命があるんじゃないか？」
果たすべき事、やるべき使命。この時代において、自分自身が無力である故にその可能性もあるという事を考えるまで至らなかった勇斗の心に、その言葉が真っ直ぐに突き刺さる。
「そ、それはご尤もですが……」
「み、三日月さんにはいないんですか、元の世界で自分を必要としている人が……！」
「いるよ」
「だったら分かるはずですよ。俺だって元の世界に戻ったら――」
「……アンタは会えるかもしれない。けど、俺達はもう会えない、帰れないんだ」
「は……？」
絶句した。三日月が先程発した会えないし帰れないという言葉。まさか、そんななず

はない。そうは思いつつも異世界転生に纏わる創作物をよく読み耽っていた彼には、それがどういう事か容易に理解できた。自分の様に生きたままで何らかの不可思議的な力の作用に巻き込まれ、異世界に連れてこられた。それとは違うという事は、つまり。

「三日月さんと兄貴は……元の世界で死んだ、のか……？」

「そうだよ。俺もオルガも、他にも大勢。俺達の仲間の大半は同じように死んでいった」

何らかの外的要因による死、もしくは病死や老死等。様々な可能性が挙げられるが、それでもそうなったという事は全てに於いて等しく一つの、共通する理不尽な事実が存在する。それは元の世界には2度と帰れないという事。

「だったら、だったら何でそんなに頑張れるんだよ、アンタ達は!?」

「言っただろ、俺達には目指す場所がある。それに……」

「死んだ奴とは死んだ後にまたいつか会えるって、オルガが言ってた」

それは生前、オルガが三日月に言った言葉。その言葉は壮絶な最期を遂げた後もずっと彼の心の中に残っているのだった。

「俺を好きになってくれた人はまだ向こうで生きてるけどね」

「でも、きっとアトラ達は俺が居なくてもちゃんとやっていけてるはずだ」

「だから、アイツらが止まってないなら、俺も止めれない、止まれない」

今もきっと彼等の世界では何とか生き残った、嘗ての仲間達がオルガ団長の最後の命

令である「自信の進むべき場所に向かって只管歩き続けろ、決して歩みを止めるな」という命を果たそうと日々努力しているはずだ。なればこそ、彼等を置いて先に旅立った自分達も地に足がつく限り、見知らぬ世界であったとしても目的に向かって一直線に進んでいかなければならない。

「アンタがやるんだったら、俺達もその使命に協力してアンタを絶対に元の世界に帰してみせる」

「だから、アンタも止まるな。自分に課された使命をやり遂げろ、スオウユウト」

ロプトやフェリシアのように過度な期待を寄せるわけでもない、かと言って自分の都合だけを人に押し付けて怒鳴る訳でもない。彼……三日月・オーガスは、今目の前にいる窮地に立たされた仲間を奮い立たせる為に、そこにいた。

「……やっぱ、三日月さんは強いな」

「でも、そうだな。こんなオレでも出来ることがあるってならやるしかない、よな」

三日月の喝を受け終わり、立ち上がる勇斗。その目は以前の様に何処か虚ろになっていたものは跡形もなく、一筋の希望のようなものを掴んだような晴れやかな光を灯していた。

「あぁ、そうだよ。俺達に見せてくれ、アンタの行く先を」

「分かった。三日月さん達を信じて、取り敢えずは頑張ってみるよ」

そう言って、三日月に立ち直らせてくれた感謝と謝罪を込めた一礼をすると、今度はフェリシアの方へ向き直り、同じように一礼して謝罪の言葉を口にした。
「それと……フェリシアさん、帰れないからと当たってしまって、申し訳ありませんでした……！」
「ユウト様……いえ、此方こそ貴方様を何処かで神格化することで配慮を忘れていたようです、申し訳ありません」
お互いに謝罪を述べることで、今まで良好な関係性を築けているようで築けていなかったこの二人の関係が漸く同等な立場へと定まった瞬間であった。

第三話・完

～次回予告～
三日月の説得によって、己が使命を果たして元の世界に帰るその時まで、この世界で戦い続けることを選んだ勇斗。あれから時が経ち、睨み合っていた《爪》との情勢を形勢逆転するため、勇斗が生み出した対抗策とは。そして、その想いに新たなガンダムフレームが咆哮する。
次回、「真・百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ」第４話「《爪》の包囲網と流

星の誓い」

コイツはそんなダセェ名前じゃねぇ……俺の相棒、『流星号』だぁぁぁぁぁッ!!

第四話「《爪》の包囲網と流星の誓い」

自らに課された使命、それを悟ってからの周防勇斗の活躍は実に目覚ましいものであった。

――ある時は、青銅製の武器が主流だったこの世界で《狼》の氏族に製鉄の方法を伝え。

――ある時は、ロプト・フェリシア兄妹と義兄弟の契りを交わし。

――ある時は、《狼》の宗主ファールバウティと親子の盃を交わし、序列１０位まで成り上がり。

――ある時は、停滞していた農業をノーフォーク農法によって発展させようとした。

そして、今。長く苦しめられてきた《爪》との闘争に終止符が打たれる……！

「戻って来られた兵は千名程、《牙》と《灰》の奇襲で多くの兵を失ってしまいました。弁解の言葉もございません、如何様にも処罰してくださいませ……！」

「……」

若頭のロプトが未だ傷が癒えぬ体で宗主の前に跪いた。勇斗の努力により、《狼》の兵士達に鉄製の武器が支給されると同時に始まった《爪》の氏族との決戦。相手側は無論青銅製の武器の為、戦局は《狼》が優勢……のはずだった。

「いや、《牙》と《灰》の動きを掴めていなかったのは、この場にいる誰もが同じ事。ヌシに責はない」

「寧ろ、その状況でありながら、よくそれだけの兵を連れ帰ってくれた。感謝に堪えんよ」

《狼》が戦場で交えた相手は《爪》だけではなかった。今まで特に動きを見せることのなかった《牙》と《灰》。その2つの氏族が《爪》と共闘をする形で、勝利を確信した《狼》軍に奇襲を仕掛けてきたのである。武器の性能差はあるものの、此方側の人数の差があっという間に劣ってしまってはその性能差などないに等しい。

「して、敵の状況は？」

「……敵は我らを破った後、グニパヘリル砦を奪い、今尚このイアールンヴィズに進軍中との事」

「その数……凡そ6千」

「「「「……!!」」」」

《狼》の残り兵力千に対して、彼方側は6千。実力者がある程度集っている《狼》軍では

あったが、これほどまでに人数差を付けられてしまっては勝機はない。その場に居合わせた全ての猛者達が一様に半ば諦観したような表情を浮かべて、俯く。《狼》は此処に来てまたもや《爪》の宗主ボドヴィッドの奸計の前に敗れ去ろうとしていた。

「あ、兄上！」

「最早抵抗しても徒に兵の命を費やすだけです。ここは潔く降伏し、《爪》の温情に期待する他ないかと……！」

そんな中、我先にと宗主の弟分であるブルーノが、敵への降伏を勧め始める。確かに現状を考えれば残酷ではあるがそれも一つの選択肢ではある。しかし――

「……父上の首を差し出してまでも我が身可愛さに溺れるか、この恥知らずが」

――自分達の主である者の首を敵に捧げてでも命辛々助かろうとするその考えを、戦場に置いて常に最前線を支えるジークルーネには真っ先に否定した。当然だ、如何に勝ち目がないと言えどそれを肯定するという事は自身が今まで戦ってきた信条を否定する事になる。それだけは、誠を守る騎士には出来ぬ考えであった。

「戦う事だけが能の小娘は黙っとれい！貴様は良くても他の者は皆殺しになるのだぞ!?」

「助かる命は多い方が良いだろう!?兄上も、もしかすれば殺されずに隠居で済む可能性もあるだろう……ここは穏便に事を進めるべきだ！」

「それはあまりに希望的観測過ぎる。あの《爪》の狸がそんな甘い判断などするものか!?」

戦場に生きる者と都を支える者、両者の意見は何方も間違ってはいない。いや、そもそもこの窮地において策を弄する時間があるだけマシであると考えるべきなのかもしれない。今の《狼》はそれ程までに追い込まれていたのである。

「もう良い、ジークルーネ。こうなった以上、我等は降伏するより他にあるまい」

「儂の首を差し出せば、ボドヴィッドの奴も町の略奪を数日に留め、奪い尽くすまではせんだろう」

「略奪だって……降伏して親父の首まで差し出すのにか!?」

彼等の口論を諌めた、宗主ファールバウティは覚悟を決めた顔で降伏する事を宣言する。その言葉を聞いた勇斗は思わずそう叫んだ。戦いによって解き放たれた人の野生はそうでもしなければ収まらない場合もある、それが戦と言うものを経験してこなかった彼には理解できなかった。

「ロプト、若頭であるヌシも儂と共に処刑されることになるだろう。済まぬな」

「……この座に付いた時より、覚悟は出来ております」

「それにフェリシアとジークルーネ」

「「はい」」

「ヌシらには辛い思いをさせることになる……だが、生きよ。生きてさえいれば、その内良い事もあるだろうて」

若頭のロプト、女兵士であるフェリシアとジークルーネ。彼等には彼等の立場があるが故に、時として何よりも残酷で何よりも不条理な役割を担わねばならない事がある。それが、戦乱の世の理。降伏した者に許された生き残るための唯一の道なのだ。

「そんな事……許せる訳ねぇだろうが……ッ！」

「仕方なかろう、これこそが最も人の死なぬ最善の策じゃ。事窮地に至ってしまったとなれば」

「奇跡でも起きぬ限り、我々に勝利の目はない」

宗主自らが口にした事実上の敗北宣言。その場にいた《狼》の兵士達全員がその言葉を受けて悲痛な面持ちで沈黙する。ある者は悔しさを滲ませ、ある者はあまりの絶望に耐えられず泣き崩れた。

「……親父、奇跡が起きればいいんだよな？」

その時だった。同じく沈黙を保っていた勇斗が突如何かを思いついたかのように口を開き、そんな言葉を発した。彼の中に宿った新たな策の気配を読み取ったファールバウティは、顔を上げて彼を真正面から見据え、彼に問いかけた。

「ヌシには策があるというのか、ユウトよ」

「ああ、今から説明する。だから皆、聞いてくれ……！」

そして、彼はその場にいる全ての者に向けて、思いついた作戦を声高らかに話し始めた。

その作戦は、この時代でも何故か使えた一台のスマートフォンによって齎された知識でもあった。彼の元いた世界で其れは只の通信機器と娯楽用品の組み合わせでしかない。しかし、このユグドラシルにおいては、其れを介して潜る事の出来る膨大なデータの海から、彼の世界が辿ってきた人類史全ての記録を、自身及び指定した対象の人物に疑似体験させる事が出来る魔法具のようなものとして存在していたのだ（※但し、歴史上から何者かの手によって抹消・削除された出来事は疑似体験不可）。

――史実疑体録（グレイブヒストリア）。彼がこの異世界に召喚された瞬間に唯一持ち得たルーンの力。《勝利の御子（グレイブジーク）》の自覚が芽生えた彼に与えられた能力だったのだ。

『この世界が俺が元居た世界……つまり地球と同様の天体周期があるってワケか』

彼が知りえる知識とこの世界の住民から聞いた知識、そして史実疑体録（グレイブヒストリア）によって得た知識。それ等を合わせた時、その『現象』はユグドラシルにおいても観測されることが分かった。

それらを見慣れておらず、果ては神の存在をエグい程に信仰しているこの世界情勢だからこそ出来た荒業。それこそが《勝利の御子（グレイブジーク）》周防勇斗が見出した作戦、その名も。

「……『恵みを喰らう天啓（スコル・ジャッジメント）』だ」

「――よォ、勇斗。首尾はどうだ？」

作戦を発起してから数日後。遂に《爪》《牙》《灰》の連合軍は、《狼》の首都イアールンヴィズの城壁外に姿を現した。そして、その様子を窓辺から伺っていた勇斗に話しかけてきた褐色肌の長身の男が一人。そう、我らが鉄華団団長のオルガ・イツカである。

「兄貴……まぁ、ぼちぼちってところかな」

オルガの問いに勇斗はガチガチに緊張しながら答えた。無理もない、彼にとってはこの世界に来て始めて戦場に身を置くことになるのだから。

「何だい、勇斗。戦が目前となったら怖くなったのかい？」

「勇斗様はこれが初陣ですもの、仕方ありませんわ」

そんな勇斗の様子を見かねたロプトが揶揄い混じりに話しかけ、フェリシアはあまりに意地悪な兄の問いかけに憤慨し、いつもの如く勇斗を庇い立てるのだった。

「大丈夫ですよ。お兄様なら、必ずや私達を勝利に導くことが出来ますわ」

更にフェリシアは庇い立てるだけでなく、勇斗の顔を自身のその大きくたわわな胸元へと抱き寄せた。その柔らかな感触に包まれて一瞬理解が追い付かなかった勇斗で

あったが、漸く自身がダイレクトに彼女の胸に顔を埋める様な状態になっていると気付くや否や慌ててそこから離れようとする。だが、それを許すフェリシアではなく、次第に彼もされるがままの状態で彼女に呟いた。
「……相変わらず、フェリシアは俺を買い被り過ぎだよ」
「将たる者は多少臆病な位がちょうど良いのです。お兄様はそれ程将の器として秀でている、と言う事ですわ」
　いつもの無茶苦茶な勇斗への贔屓倒しも、此処に来て更に一段と強引な論となってはいたが。
「……ルーネ、緊張してる？」
「あ、い、いや、そういう訳ではない！私は大丈夫だ、三日月」
「ふーん、そっか」
　そして、そんなフェリシアを後ろから羨ましそうに眺めていたジークルーネに、何時ものようにポケットから火星ヤシを取り出し、もぐもぐと咀嚼している三日月が声を掛ける。この世界で共に同じ場所で過ごすことが多かったお陰で彼等もすっかり仲良くなったようではあった。
「やっぱスゲェよ、ミカは……」
「オルガも気に入った女がいるなら早めにキープするべきだと思うよ、何なら紹介しよ

うか？」
「い、いや、俺は別に……」
　ジークルーネと大分仲良くなった三日月の姿を、オルガは何処か眩しそうなものを見る目で見つめていた。そして、それに気付いたロプトが横から茶々を入れ、オルガは少し照れて目を逸らす。異世界転生を幾度となく繰り返してきたオルガではあったが、未だに異性交遊の話となると初心な中学生みたいな反応になってしまう癖は治りそうになかった。
「……よし、それじゃあ一世一代の大芝居、成功させてやろうぜ皆！」
「ああ。俺達の邪魔する奴は、全員殺す」
「そんじゃあ、反撃開始と行こうかぁ！」
　フェリシアの抱擁から漸く解放され、少しばかり気分が高揚した勇斗が首元に巻いた漆黒のマントを翻し、その場にいた全員を引き連れ、自身の持ち場へと移動した。元は《狼》の前の宗主との間に親子の盃を交わしていた《爪》の現宗主・ボドウィッド。前宗主が亡くなると共に《狼》を裏切り、自身が主体となった国を作るべく動いた男との全面対決は、こうして幕を開けた。

「よくぞ来た、神に仇為す不心得者共！」
「我はアングルボダより遣われし勝利の御子にして、この《狼》の守護神スコルなり！」
「我等《狼》を父母として生を受けながら、盃の誓いを忘れ親に弓を引く愚か者共よ。これ以上我等に仇為そうと言うのであれば、貴様等には神の怒りが降りかかるぞ！」
　自らをアングルボダの御使い、守護神スコルと名乗った勇斗。彼の宣言と共に籠城戦が始まり、一週間の時が過ぎた。史実通りであれば……此処で彼等は、ボドヴィッドの実の娘達のルーンの力によって苦戦を強いられ、その状況下で勇斗の秘策『恵みを喰らう天啓』によって逆転のチャンスを作り出す事に成功する訳なのだが。
　――そう、それはこの物語が史実通りであったなら、の話である。
「あれから《爪》の動きはない、か……」
「ふふっ、きっとお兄様の作戦が上手く功を奏したのですわ」
「……」
　町の周囲をぐるりと囲った巨大な門の上、そこで勇斗、フェリシア、オルガは戦況の動くであろう瞬間を固唾を飲んで見守っていた。勇斗の作戦『恵みを喰らう天啓』は、相手側である《爪》が先程の勇斗の忠告を期限と定めた一週間後に破り、攻めの動きを見せた時こそが出し所。
　この戦の為に、彼はロプトの紹介でこの町一番の鍛冶職人であるイングリットと知り

合い、彼女に史実疑体録を見せ自らも現場に加わる事で鉄製の武器の作り方を伝授し、兵士達の武器を青銅製のものから鉄製のものへグレードアップを計り。更には、この世界の文明水準から２５００～３０００年先の技術に当たる先進兵器……『平衡錘投石機（トレビュシェット）』、所謂「投石機」を完成させた。後は、この作戦の最重要項目である「サロス周期」によって引き起こされる日食現象。それが起きた時、闇に紛れて投石機で石を飛ばせば「投石機」の存在を知らぬ彼等は、勇斗が天から隕石を降らせて見せた……ように錯覚し、混乱を招くのは必至だろう。要はその隙を利用するのだ。

「ロプトの兄貴達には下で待機してもらっている……だが、相手側は陣形すら組んでいない」

「なぁ、ユウト。いよいよ、きな臭くなってきたんじゃねぇか？」

　オルガが勇斗にそう問いかける。オルガは彼よりも戦場に立つといった経験が長く、例えこの戦闘形式で戦ったことはなくとも、戦場の空気の変化と言うものはいち早く感じ取れていた。

「兄貴……オレ、やっぱり何か――」

『ズガァァァァァァァァァァァァァン!!』

「――ッ!?」

　勇斗がオルガに何かを問い返そうとした、まさにその時。突如、彼等のいる巨大な門

の内部に、地震が起きたかのような激しい揺れと何かが此方へ突っ込んできたような轟音が鳴り響く。

揺れが収まり、勇斗はフェリシア、オルガを連れて上の見晴台へと登り。

――そこで、驚愕の光景を目の当たりにする。

「な、何だよ……これ……!?」

門の正面から見て東側。そこの城壁とも言える頑丈な壁に、見たこともない鉄の杭が突き刺さり、その周囲の壁と民家全てを跡形もなく消し飛ばしていた。

「まさか、アレは……!?」

呆然と立ち尽くす勇斗とフェリシアを心配しつつも、自身が一番懸念していた事項が当たってしまった。そう後悔したオルガが、ポケットに入っていた望遠鏡を覗き、その方角の先に見つけたものは。

「ダイン、スレイヴ……!」

ダインスレイヴ。それは、オルガ達が元いた世界で起こった『厄災戦』と呼ばれる戦いで猛威を振るった、人が生み出した無人の殺戮マシーンＭＡ（モビルアーマー）。彼等を殲滅する為に作られた謂わば人類の最終兵器。その破壊力は絶大で、戦後に結ばれた条約にて禁止兵器に指定された、禁忌の力。

無論、此方側で用意した投石機とは、威力も技術力も遥かに桁違いの代物であった。

「(どういう事だ、何でこの世界の文明水準レベルでアレを持ってるってんだ……!?)」
「(くそっ……考えたところでまるで分らねぇ。頼みのミカには《角》や《蹄》を警戒させてるから下手に動かせねぇし……どうする!?)」
　考え込んでいるうちに、向こうは二射目を放とうとしている。無理だ、アレを防げるほどの大規模なモノをこの世界で作れるはずがないし、そもそも作れたとしても時間がない。だが、次当たれば間違いなく此処の街一帯が吹き飛んでしまう。
　何処の誰に齎されたかは知らないが、《狼》にとって限りなくチェックメイトに近いこの状況。オルガを含め、全員が勝利を諦めかけた時。
　ソレは、空から舞い降りた。
「――漸く、このオレ様の出番って訳だァ!!」
「あれは……!」
　天から舞い降りし、ド派手なピンク色に塗装された謎のＭＳ。その機体は地面に着地するや否や通常形態から射撃形態へと変形し、先程のダインスレイヴ弾頭が飛んできた場所を真っ直ぐに狙い定める。オルガは、その場から思い切り彼の名を呼んだ。
「やっちまえ……シノォォォォォォォォォォォォ!!」
「はっ、言われなくてもやってやんよォ！行くぜ、必殺！」
「対兵装超時空破砕砲（スーパーギャラクシーキャノン）、発射ァ!!」

――彼……シノがそう叫ぶと共に。彼が身に纏うＭＳ『ガンダムフラウロス』は、構えた二つの砲撃口から相手側が放ったモノと全く同じモノを発射する。
その２発のダインスレイヴ弾頭は、一ミリも逸れることなく真っ直ぐに飛んでいき。一発は同時に発射した相手側の２発目の弾頭を相殺し、もう一発は相手側の陣地へ確実に撃ち込まれた。

斯くして、この砲撃を以て《狼》は、《爪》《牙》《灰》の軍勢を撥ね退け、見事に勝利を収めた。
「――ほう、流石は鉄華団だな。それでこそ潰し甲斐があると言うものだ」
「今はまだその時ではない……が、もしその時が訪れたのなら」
「あの闘いの再演をしようか。私と君達の命運を分けた、あの闘いを」
正史とは全く異なる形で勝利を得た彼等が、やがてまだ見ぬ異聞帯の闘いへ巻き込まれようとは。
この時はまだ、この男以外に誰も知る者はいなかった。

第四話・完

～次回予告～

《ｌｅｆｔ》猛威を振るった《爪》の連合軍を下した《狼》。勇斗の作戦通りに行かなかったこの闘いだが、《狼》の宗主ファールバウティはこの戦に臨めたのは間違いなく勇斗の功績だと言い、彼を次代の《狼》宗主へ指名する。そして、遂にその瞬間は訪れた。

《／ｌｅｆｔ》

次回、「真・百錬の覇王と誓約の戦乙女と鉄血のオルガ」第五話「黒き覇王の誕生」

そうか……最初から、最初からこれを狙っていたのだな。周防勇斗オオオオオオオッ!!